鈴木静一展
鈴木静一個展演奏会
指揮　高草木 典喜　小穴 雄一
演奏　個展マンドリンオーケストラ
2018年 5月20日（日） 開場13時　開演13時30分
東京オペラシティコンサートホール　タケミツ メモリアル
Seiichi Suzuki

第一部　　指　揮　　髙草木典喜

組曲「鐘の港」(1972年)
　海を渡るアンジェラスの鐘（稲佐にて）
　プロムナードと蝶々夫人の幻想
　遠い祭りと祭りの街

交響譚詩「火の山」(1969年)

第二部　　指　揮　　小穴雄一

交響詩「月の変容」ドビュッシーの「月の光」を主題とする（1975年）

「氷の精に魅せられたルディ」～アンデルセンの童話による～（1968年）

アコーディオン	大田智美
ソプラノ	手島由紀子
ナレーター	新澤　泉

ごあいさつ

鈴木静一さんの曲を弾きたい、ただそれだけの思いで集い、静一さんの音楽に酔いしれる、これが「鈴木静一展」のコンセプトです。今回も64団体に所属する有志140名が、遠くは九州、広島、大阪、甲府、小淵沢、長野、静岡、宮城から駆けつけてくれました。静一さんの音楽の魅力とはいったいどこにあるのでしょう。おそらくそれは静一さんが生涯をかけて映画音楽を手がけてこられたことによる描写にあるのではないでしょうか。静一さんの作品を眼を閉じて聴き入ってみると、必ずその作品の風景が浮かんできます。この絵画性ともいうべきは、静一さんの作品の最大の特徴のひとつに違いありません。ですから、静一さんの作品は作曲者自らが書き留めたソネット（ト書き）と合わせて味わうのがなによりです。どういう思いを込めてその作品を描いたのか、そのヒントがそこに込められているからです。まずソネットを読む。眼を閉じる。音楽に身を寄せる。これが静一さんの音楽の味わいかたに相違ありません！

本日、第一部は、人気の演目。一曲目は長崎の異国情緒ただようエキゾチックな作品、「鐘の港」です。二曲目は静一さんがつねに対峙された大自然に向かう畏敬の念、その骨頂たる「火の山」。恐ろしく鼓動するマグマのエネルギーが炸裂します！

第二部は静一さんの作品でも比較的演奏される機会の少ないナンバーから選んでみました。一曲目は「月の変容」。歴史絵巻物をあれこれ認められて、最後はついに地球を脱して宇宙に繰り出してしまうんですね！そして終曲はアンデルセンの童話に取材した「氷姫（氷の妖精に魅せられたルディ）」。舞台は長閑なスイスアルプス。クレパスに潜む妖女が、主人公ルディを死に追いやるという物語。得てしてメルヘンの童話は残酷なもので、それだけに教示的なものです。

旅好きだった静一さんは、道すがらさまざまな刺激を全身に浴びながら想像を掻き立てておられたのでしょう。本日、会場の皆様ともひとつになり、静一さんが辿った旅路に思いを寄せ、どこまでも、どこまでも、たおやかな音楽に酔いしれたいと思います。

鈴木静一展 発起人代表　小穴 雄一

組曲「鐘の港」(1972年)

私は1934年頃、長崎を訪れた想い出があるが、作曲を思い立ったのは最近「九大」の招きで福岡に行った時である。その時或る人にそれを計ったところ、古い記憶だけで書くことを薦められた。理由は、今日の長崎の変容だった。

これは、痛ましい原爆を知らない――現代文化の手の届かなかった大戦以前の長崎――今よりもっと異境のイメージの濃かった長崎の想い出なのである。(1972年5月)

Ⅰ　海を渡るアンヂェラスの鐘（稲佐にて）

　秋だった
目の下に拡がる　港の向こうに　あの異人館や唐風の寺
そして　壮麗な２つの天主堂が　ひときわ目だつ
長崎の街が　秋空の下に息づいていた
さっきまで　足下の造船所からの　ハンマーの騒音は　いつか消え
海に　街に　夕暮れが忍びよっていた
右の天主堂（大浦）だろう　鐘の音が起った
それに　誘われるよう　左の（浦上）方から　別の鐘が・・
　あ々！　アンヂェラスの鐘！
ふたつの鐘は互いに　響き交わし　安息の夜を迎えようとし
街には　灯かげが　またたき始める――

Ⅱ　プロムナードと蝶々夫人の幻想

　次の日は　音もなく　降り注ぐ　秋雨に明けた
古めかしい　しかし　それが　なんとも　懐しい電車の走る　街を散歩する
――出島――眼鏡橋――唐風の寺院――
蘭館と呼ばれる　オランダ風の古い洋館――
私は　強い異国情趣　溢れる　街のたたずまいに酔いし
あてもなくさまよう
踏んでいく濡れた石畳の道は　オランダ坂　そして美しいサンタマリアが
やさしく手を　さしのべる　天主堂――
やがて　私は　街と海を見おろす庭園の中に　八葉の屋根をいただいた
異人屋敷を見つける
まるで待ちかまえていたよう　ひとつのメロディーが高く耳に溢れた！
プッチーニのオペラ“蝶々夫人”の（或る晴たる日に）だった

Ⅲ　遠い祭りと　祭りの街

今朝も　稲佐の山路を歩く
　静かだった――毎日　響き渡っていた　造船所のハンマーの音が無い――
その静かさの彼方から　微に　笛や鉦　太鼓の音が海をわたってきていた――
そうだ！今日は　諏訪神社のお祭り　お宮日！
唐人行列――オランダ漫才――船御輿――
それから　中国の竜頭籠からとった　蛇踊り――
長崎のエキゾティカは頂天に達する！
何十年も見なれた筈の人達まで　気を昂ぶらせ　はやしたてる！
祭りの街は　たのしい喧嘩に　ふくれあがっていた

（自筆スコアより）

交響譚詩「火の山」(1969年)

この曲は1969年九州大学マンドリンクラブのために作曲されたものである。
本曲作曲の動機について作曲者自身、次のように述べられている。
“この譚詩音楽構成には、火山の噴火がもたらす災害を除外することができない。私は日本に残る（伝承される）素朴な子守唄を、その主要主題にしたいとはじめから考えていた。私の最も好きなのは「中国地方の子守唄」であった。しかし、中国地方は火山を持たない。それで、その次に好きな人吉の五木のそれを取り上げた。従って、この「火の山」を作曲する脳裏には、いつも阿蘇霧島のイメージが働いていた”
——おおらかに静かに聳える時、火の山も神々の座——だが、その下には恐るべき破滅をもたらす暴力を秘めている。地殻に沸ぎるマグマは、山自身が造り上げた巨大なモニュメントの重圧に抗し、刻々狂暴な熱エネルギーを蓄積する。微かな地下のどよめきに敏感な動物の移動が始まる。日増しに高まる地鳴り。鳴動に人間が気づいた時は既に遅い！
奔然！　爆発は瞬時に来る！　気体とは思われない重圧感を持つ噴煙は天空を蔽い、その中を灼熱の岩塊が貫いて飛び、神々の座は一瞬にして悪魔の城砦に変容する。恐るべきはその後に来る溶岩の奔流——それは、あらゆる地衣樹叢を焼きつくし埋めつくし人里に迫る！そして巨大な溶鉱炉が吐き出す熱鉄の流れに鋳つぶされるのを遮る荷物も持たぬ人里のもろさ——火の山の暴逆がおさまった後には冷酷な寂寥が残る。
肉親を失った子の——子を失った親の嘆きの歌は全燼の残る焼け野を悲しくさまよう——氷雪の冬にも春が訪れよう——長い年月荒廃に沈んでいた山麓の溶岩台地の一角にふと！　一茎の草が芽を吹く——野生の逞しさ萌黄は見る間に焼野——火山灰地にまで拡がる。そして呪われた焼土は緑の衣に痛ましく焼けただれた地肌を隠す。それに誘われた人間も、住み馴れた土をしたい山麓に戻り、かつての生活を取り戻す。山畑がすかれ植林が進みやがて季節季節には盆踊りや村祭りが色どりの少ない山村の春秋を色どる。そして人間はいつとはなく肉身を奪った、郷土を破滅させた火の山の恐怖を忘却する。
——だが山は忘れない！　またもや蓄積される地軸の熱エネルギーに不気味な胎動を始める。間をおいて起こる爆発の前駆、鳴動にも馴れ警戒を怠る——そんな人間を恐れるかのように山はまた爆発を繰り返し惨禍をまき散らす。

（自筆スコアより）

「鐘の港」と「火の山」のこと

指揮　高草木　典喜

第1部で演奏する、組曲「鐘の港」と交響譚詩「火の山」はいずれも九州にある地を題材にしているが、各々の作品としての意義は大きく異なる。
長崎の秋の情景を描く「鐘の港」は、映画音楽作家でもあった鈴木静一の面目躍如。その風物が目に浮かぶ。
秋の夕景。長崎の街が一望できる稲佐山に立ち、眼前の長崎湾を超えて大浦天主堂の鐘が、一方、湾に注ぐ浦上川を跨いで浦上天主堂の鐘が響いてくる。夕焼けはなぜか寂しさや懐かしさを感ずる。鐘の音を耳にしつつ街は暮れなずむ。秋の陽が落ちるのは速い。やがて夜の静寂(しじま)へ・・・(第1楽章)。あくる朝、霧雨の中、街を散歩する。長崎の街は雨がよく似合う。路面電車に郷愁を感じ、洋館が立ち並ぶ街をさまよいながら坂を上って辿り着いたグラバー園。いつしか雨は上がり、邸の庭から晴れやかに港や街を見下ろす。蝶々夫人の有名なアリアが美しく豊かに変奏されて鳴り響く

･･･（第２楽章）。次の日、諏訪神社から聞こえる笛太鼓。長崎の御宮日（おくんち）の日であることを思い出す。居ても立っても居られない！場所柄、阿蘭陀や中国から来た人も多かったこの地の祭りは、異国情緒溢れる演し物がこれでもか！と繰り出し、人々も、もう止められないほどの興奮の渦に･･･（第３楽章）。

私は長崎の地図に釘付けになりながら、昔訪れた彼の地の光景を瞼の裏に蘇らせながら、スコアを読むのが楽しかった。そして、それを皆で音にする喜びに感謝している。

そして、雄大な阿蘇 -「火の山」。神々しいまでの勇姿。だが、この曲はそんな山の風物を描いているのではない。作者氏の、ある意味、思想や哲学までも織り込む。
如何ともし難い自然の獰猛。時を置き、その獰猛が地底で蠢き、鳴動し、そして突如として地上に滾りを噴出する。その威力は、地上からあらゆるものを消し去っていく。そう、人も草木も。人は嘆き、悲しみ、･･･諦める。だが、人も草木もまた靭い。地表を覆った溶岩の塊を突き破るように芽が吹き、その緑を糧に人は生を営む。里が拓け、皆で躍る･･･。
生命は強く、そして弱い･･･抗えない天変地異、人はそんな矛盾や、畏敬あるいは畏怖の前で何を思えば良いのだろう。いや、そんな陳腐な言葉では何も表せない。
作者鈴木静一には、確実に、それに対して慮いがあったのであろう。もう随分昔、私はこの曲のスコアを初めて眺めた時、震撼した記憶がある。大地が揺れ、人が慟哭し、力強く芽が吹き、力強く人々が群れる。音符だらけのスコアに、そんな絵もストーリーも描かれているように思ったからだ。でも言葉では尽くせない。そう、音楽でしか伝えきれないのかもしれない。

この２曲では、方や３日間の長崎での風物、もう一方は地球や人類の歴史を考えさせられる、そんな時間軸が全く異なる世界に眩暈がしそうだが、前者では単純に風景を描いてその中で遊んでみたいし、後者では言葉では表せないものを、何とか音で力強く語ってみたい。

交響詩「月の変容」ドビュッシーの「月の光」を主題とする（1975年）

かつては、その幽玄の光は、美しい詩歌・音楽を生み、恋愛育てた月。
1969年、アメリカが月面着陸を目指す人工衛星アポロ11号が打ち上げられた。アポロは、全人類の期待と不安を乗せ、信じられない高速で宇宙を翔けり、遂に月面着陸を果した。

しかしそこには、生物はおろか一草一木も、一滴の水もない灰色の砂原が無限に広がり、クレーターの、山とも云えない岩の高まりと浅いくぼみが、僅かに単調を破るだけ。すべては暗黒の空の下に冷酷なたたずまいを露呈する。

かくして、月への夢は完全に破られた。人類の月を見る目は失望と哀愁に曇り、人智の進化を呪い嘆く。

月は今も変らぬ光を夜空に留めている。その悲しみを掻き乱し、月への衛星発射はさらに続く。

（「中央大学　第29回定期演奏会初演パンフレット」より）

「月の変容」のこと

指揮　小穴雄一

静一さんはどのような思いでこの作品を書かれたのでしょう。静一さんに接する機会はありませんでしたが、楽譜に刻まれた音符を辿ることで想像は掻き立てられます。米国アポロ宇宙計画に心打たれるものがあったのは容易に想像できるところですが、それは一つのきっかけに過ぎなかったのではないでしょうか。月への想いが、宇宙船で空を駆け巡るファンタジーを仕立てあげたのかもしれません。静一さんはフランス近代音楽に傾倒されていましたから、ドビュッシーも大好きだっ

月周回軌道から見た地球

たのでしょう。

いきなり直球で登場する月の光。空にぽっかり浮かんだお月さまを見上げて、あぁ、なんて美しいのでしょうとため息を。そんな静寂を破るように、どこか破壊的と思えるアポロ発射。ここは衝撃的ですね。ここのオーケストレーションはものすごいことになっています。重力に逆らってその巨大な物体を垂直に打ち上げようというのですから、相当な負荷がかかります。しかし成層圏を抜けるころには重力の縛りからすっかり解放されて、宇宙船は無重力の空間にふわっと舞うようです。スタンリーキュービック監督の2001年宇宙の旅では人類が手にした道具（兵器）を空に投げると一気に時空をワープして宇宙を遊泳する宇宙船に入れ替わりました。美しく蒼きドナウの調べに乗って、宇宙船は優雅なワルツを舞うよう。無重力の世界を静一さんはトロンボーン、神の楽器で描いています。しかしいかに精緻に創り上げられた宇宙船であっても、発射の際の膨大なエネルギーによって思わぬ支障を来たしてしまう、どこか人類に対するひとつのメッセージなのかもしれません。計算通りにはいかず誤差が生じてしまうのです。それは音楽を構成するモチーフに感じ取ることできます。

この宇宙船、実にかっこいいですね。何かこうメカニックな出立ちで、これぞ人類の叡智の結晶、みたいに誇らしげにきらきらと輝いているようです。幾度も細かい噴射を繰り返しながら軌道を修正します。一見順調な航海を繰り広げているかのようですが、発射のときに被った不具合は中低音に現れる不吉な旋律によって表されます。（通称、ミトコンドリアサウンド！）ときおり聞こえる「ピンポン！」という不吉な音はいったい何を現しているのでしょう。精巧なメカニックをつなぎとめる大切なネジが緩んで飛んでしまったか、あるいは軌道修正するときに繰り返される噴射音のようにも聴こえます。気がつかないところで、そのわずかな綻びは少しずつ増幅。そうこうしているうちに第２噴射。今度は無重力状態のなかでの噴射なので、重力に逆らうときのようなエネルギーは不要です。月探索船の切り離しには無事成功し、月を目指して突き進んでいきます。しかしながら、月面着陸の際には舵がいうことをきかず、ふらふらと糸の切れた凧のように舞い降りていきます。やれやれどうにか不時着しました。

ハッチを開けて月に降り立つと、これはいったいどうしたことでしょう、草も木も一切生えない岩だらけの荒涼とした風景が延々と広がっているではありませんか。なんというところに来てしまったのでしょう！あれほど憧れの念を抱いていたお月さまなのに！果てしなく薄暗く、岩肌だけに覆われた魑魅魍魎たる景色の前に、ただ首を垂れて佇むよりありません。あてもなく、とぼとぼと歩きながら、ふと空に目をやると、青い星が目に留まります。あれはいったい？そうだ、地球だ、地球に違いない！青い地球。あぁ、なんて美しいのでしょう！あれはわたしたちの故郷！こんなところに長居は無用、なんとしてでもあの輝ける星に帰らなくては！なんとか着陸した宇宙船は大丈夫？かなり部品も飛び散ってしまって、傷だらけになってしまいましたが、はたしてちゃんと離陸できるのでしょうか。点火してみる。だめだエンジンがかからない。２度目。よし、かろうじて点火成功！やれやれ、これで地球に帰れます！面舵いっぱい！いざ、生命の宿る美しい惑星、地球を目指して帰還の途に！

学生時代に静一さんの曲を演奏する機会がありませんでしたが、高校３年生のときに中央大学の定期演奏会で「失なわれた都」を聴いて、たちまち静一さんの音楽の虜になってしまいました。以来中央大学、日本女子大学の定期演奏会には毎回足を運び、飯塚幹夫さん指揮による「月の変容」の初演に遭遇する機会にも恵まれました。この曲、手強いです！とにかく仕掛けが満載で、ひとつ一つのモチーフを描き分けるのは大変でした。静一さんが晩年に思いを寄せた宇宙を駆け巡るロマンに心底浸ってみたいと思います。

「氷の精に魅せられたルディ」～アンデルセンの童話による～（1968年）

この物語の表題は、邦訳は全部「氷姫」となっているが、どうも私には「姫」というと日本のお姫さまのイメージが強く、ことにこの物語の場合、凄味を欠くような感じがあってピンとこない。それでこんな表題をつけたわけである。

この物語の舞台は、スイスのベルナーオーバーランドとヴァリスの両地方に跨がっているが、私は大切なグリンデンワルドを真近にしながら遂にその土地を踏まなかった。インターラーケンから出るユングフラウ行の電車線は、途中クライネシャイデックでグリンデンワルドとユングフラウヨッホに分かれる。そこはちょうど死の山アイガーの西裾に当たり、その反対の東裾寄りにグリンデンワルドの村がある。私はグリンデンワルドにも行きたかったが、それより生まれて初めての4000mの高度を持つユングフラウヨッホに登りたかった。クライネシャイデック駅からは、左手頭上にそそりたつアイガーの北壁から東稜の裾の谷間になだらかな緑の草原が広がり、ところどころ積木細工のような人家が点々と見られ、しきりに私を誘惑したが、海抜4000mが私をヨッホに行かせてしまった。しかし帰りがけには、なんとしてもグリンデンワルドに寄るつもりであったが、ヨッホで遊び過ぎ、シャイデックに戻った時、日暮れの早い谷間は黄昏れ、遂にその機会をのがしてしまった。

その時、ヨッホを諦めグリンデンワルドに行っていたら――そしてせめて氷河を登れる装備があったら、ルディが母親に抱かれ陥ったクレバスの実態を直に見られたかも知れないと思うと残念でならない。

しかし、ヴァリス地方は、アルプスの盟主マッターホルンを見るため（登るためではない）ツェルマットに入った途端、レマン湖の方に出て行ったが、その街道はたえずローヌ河の渓谷を走っているので、車窓からではあるが、ヴァリスの村里や山峡にかかる水車小屋のたたずまいなどを見ることができたので書くのが楽しかった。

また、この物語の終わりに出て来るレマン湖の小島は陰うつなシヨンの古城から見たような気もするが、はっきりしない。想像力は人一倍強いくせに、実在の土地を舞台にするとなると、どうもそれにこだわる癖が私にはあるらしい。私は生まれつき表題音楽を書くように出来ているのであろう。

余談になるが、この曲では、そのシーンを除いたが、原作では氷の精が、スイスからイタリアに抜けるシンプロントンネルの工事を下見し、そこで働く人間や蒸気機関車を罵るくだる。これはアンデルセンが、アルプスを訪れた年代を物語っている。シンプロントンネルの開通は1900年頃と記憶する。これについて私には、経過にとんでもない誤りを犯したものを思い出した。それはマンドリンのオリジナルでシンプロントンネルの開通祝賀に寄せた「センピオーネトンネルの貫通」と題するジョバンニ（？）の序曲がある。（センピオーネはイタルア語のシンプロン）それが書かれた時分が分かったのである。恥ずかしいことであるが、大正末期頃、私たちはトンネルの貫通を突貫（戦争での）と誤訳し、堂々とプログラムに載せていたのだった。“トンネルはたいがい突貫工事になる”ではすまされない、ひどすぎる誤訳である。

私のアンデルセン童話による物語のための音楽も「人魚」「マッチ売りの少女」に続き３つ目になったが、私はこの後も、忘れていた童心を懐かしく思い出させてくメルヒェンものを、いくつも書きたいと思っている。

（「鈴木静一　そのマンドリン音楽と生涯」より）

鈴木静一氏
プロフィール

1901年　東京に生まれる。
　　幼少の頃よりオルガンを覚え、また、父親から謡曲を仕込まれる。
　　中学音楽教師吉沢氏に作曲和声を師事、サルコリ氏のもとで音楽家を志すが、氏の勧めにより声楽をあきらめ、ギターやマンドリンを弾き始める。後、才能を認められ、作曲活動も始める。
1923年　カラーチェ来日。奏法について助言を受ける。
1924年　渡伊、途中シベリウス氏に会う。
1925年　東京マンドリンクラブを主宰。
1926年　東京コンサバトアル講師。
1927年　東京マンドリン協会が創設され指揮者になる。オルケストラ・シンフォニカ・タケイ（O.S.T.）主催の第1回マンドリンオーケストラ作曲コンクールに、「空」が2位入賞（1位該当作品なし）。
　　JOAK（NHK）ラジオ第1放送にマンドリンソリストとして出演。
1928年　O.S.T. 第2回作曲コンクールにも、「北夷」が2位入賞（1位該当作品なし）。
1930年　北海道大学アウロラの招きで北海道リサイタル。
　　この頃、JOAK 交響楽団の指揮者ケーニッヒ氏より指揮を、武蔵野音大教授ウーファベニ氏より近代音楽の和声法を学ぶ。
1933年　渡欧。フランス、スペイン、イタリアを旅する。途中、イタリア・サンレモのホテルで偶然シベリウス氏に面会。「蝦夷」についての助言を得る。
1934年　管弦楽組曲「蝦夷」を作曲、翌年帝国海軍軍楽隊交響楽団によって演奏される。
1936年　日本ビクターに入社、マンドリン界を遠ざかる。主として、藤原義江歌劇団の編曲、指揮を手がけ、さらに流行歌の作詞作曲でも活躍。PCL コンクール映画「唄の世の中」音楽監督として好評を得る。
1937年　東宝に移る。
1941年　平井英子（ビクター所属）と結婚。この頃、黒澤明監督「姿三四郎」ほか、「ハワイ・マレー沖海戦」「加藤隼戦闘隊」など、多くの映画音楽を担当。
1945年　戦争映画の作曲にあたったため、戦後、進駐軍からのレッドパージを恐れ、NHK 放送でシンフォニック・ジャズ風の編曲をする。
1949年　シベリウス氏に再会し、正式入門を許されるが、多忙のため留学を断念。
1962年　テレビの普及で映画が不況となり、劇場音楽に進出。
1965年　旧友小池正夫氏の死を悼み、「カンタータ　レクイエム」を作曲し、専任指揮者小池氏を失った竹内マンドリンアンサンブルによって発表。同時に同アンサンブルからの求めに応じ、旧作「人魚」を改作し、これが契機となりマンドリン音楽界へ復帰。
1980年　5月　民話のふるさと「遠野郷」を発表。　5月27日、永眠。

約450曲に及ぶ映画音楽、流行歌の作曲を手掛け、商業音楽の世界で、頂点を極める活躍をした。黒澤明監督「姿三四郎」や“たんたんたぬきの～”の替え歌で歌われた「煙草屋の娘」が有名。多くのマンドリンオリジナル曲の作曲や、クラシックの編曲作品を発表すると同時に、学生を中心とする数多くのマンドリンクラブの音楽指導にも情熱を注ぎ、マンドリン音楽の繁栄に大いに貢献した。

《作 品》［ ］内 初演団体

管弦楽

○ 管弦楽組曲「蝦夷」(1934 年)
○ 綺想曲「日月潭の歌」 Op.28（1952 年、初稿原題「日月潭の蛮歌」）(1939 年)

マンドリンオーケストラ

○ 組曲「山の印象」Op.1（1924 年、1965 年改訂） ［旧作・4 楽章版・京都帝大］
○ 黎明序曲 Op.3（1925 年、1972 年改訂）
○ 祝典序曲 Op.25（1926 年、1968 年改訂）
○ 小組曲「ロシア」Op.10（1926 年）
○ 「荒城の月」によれる狂詩曲 (1926 年、1933 年改訂)
○ 幻想曲「田園風景」～黄昏と夜の祭（1927 年、1969 年改訂）
○ ヴェルレーヌの詩に拠れる楽詩「あやつり」Op.12 (1927 年)
○ ヴェルレーヌの詩に寄せる三楽章（1927 年、1966 年改訂）
［オルケストラ・シンフォニカ・タケイ］
○ 狂詩曲「海」Op.13（1927 年、1970 年改訂）（1927 年、初稿原題 「海の狂詩曲」）
○ 交響詩「北夷」Op.26（1928 年、1966 年改訂） ［北大アウロラ］
○ 峠 Op.11 (1928 年)
○ 行進曲「憧れの北国」(1928 年)
○ 黄昏の俚歌～日本民謡風の小品（1928 年）
○ 交響詩「曠野の賦」 Op.36（1929 年）
○ 組曲「樺太の旅より」(1930 年、1967 年改訂） ［北大アウロラ］
○ 真夏への讃歌 Op.5 (1931 年)
○ 創造～札幌プレクトラム協会行進曲 (1932 年) ［札幌プレクトラムソサエティ］
○ 綺想曲「日月潭の歌（1952 年、1966 年改訂)」
○ 組曲「山の印象」 Op.1 (改作・3 楽章版) ［東京プレクトラムソサエティ］
○ 亡友 小池正夫に捧げる「カンタータ・レクイエム (挽歌)」(1966 年)
［竹内マンドリンアンサンブル］
○ 抒情組曲「蝦夷」(1966 年) ［北大アウロラ］
○ 芭蕉の句と広重の絵によせる幻想曲「富士旅情」(1966 年)
○ 桜幻想曲（1966 年）
○ ヴェルレーヌの詩に寄せる三楽章（1966 年） ［オルケストラ・シンフォニカ・タケイ］
○ 「スペイン」第一組曲（1966 年） ［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 幻想曲「ボルガ」ロシア民謡による幻想曲「ボルガは流れる」(1967 年)
○ 交響的大幻想曲「シルクロード」Op.50（1967 年） ［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 「スペイン」第二組曲 Op.55（1967 年） ［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 琴と太鼓（1967 年）
○ 劇的序楽「細川ガラシャ」Op.57（1968 年） ［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 交響詩「失なわれた都」(1968 年) ［九州大学］
○ 「スペイン」第三組曲（1968 年） ［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 楽詩「雪の造型」Op.58（1968 年） ［北大アウロラ］
○ 交響譚詩「火の山」(1969 年) ［立命館大学］
○ 「ふるさと」をテーマとする主題と変奏（1969 年）
○ 北原白秋の詩に寄せる音楽詩「柳河抄」(1969 年) ［九州大学］

○ 大幻想曲「幻の国」～邪馬台（1970年、1972年改訂）［九州大学］
○ 日本二十六聖殉教ミサによる悲愴序曲「受難のミサ」（1970年）［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 音楽詩「美しき川長良」（1970年）［岐阜マンドリンオーケストラ］
○ 交響詩「比羅夫ユーカラ」～北征の史（1970年）［北大アウロラ］
○ 大学祝典曲「栄光への道」(1971年）［中央大学］
○ 交響詩「維新の陰に」～皇女和宮降嫁（1971年）［九州大学］
○ 組曲「鐘の港」（1972年）［中央大学］
○ 組曲「パゴダの舞姫」（1974年、1975年改訂）［日本女子大学］
○ ドビュッシーの「月の光」を主題とする交響詩「月の変容」（1975年）［中央大学］
○ 交響詩「天草キリシタン」（1977年）［中央大学］
○ 魅惑の島バリの夜（1977年）その後「バリのガメラン」に改名［日本女子大学］
○ 民話のふるさと「遠野郷」（1980年遺作）［日本女子大学］
○ 交響詩「ヒマラヤ」（未完成）

音楽物語（マンドリンオーケストラとナレーション、独唱・合唱など）

○ 音楽物語「人魚」Op.2（1924年、1966年、1968年改作）［東京プレクトラムソサエティ］
○ アンデルセンの童話による音楽物語「氷姫」～氷の精に魅せられたルディ（1968年）
○ アンデルセン童話による物語音楽「マッチ売りの少女」（1969年）
○ 長谷雄卿絵巻による音楽物語「朱雀門」（1969年）［日本女子大学］
○ アラビアンナイトより音楽物語「アリババと40人の盗賊」（1971年）
○ 「当麻霊異」～二上山古墳にまつわる物語（1970年）その後「死者と貴姫」に改名［日本女子大学］
○ 平家物語「西海の挽歌」（1972年）［日本女子大学　1973年］
○ 音楽物語「雪の女王」～アンデルセン童話による～（1975年）［日本女子大学　1976年］

映画音楽（主要作品）

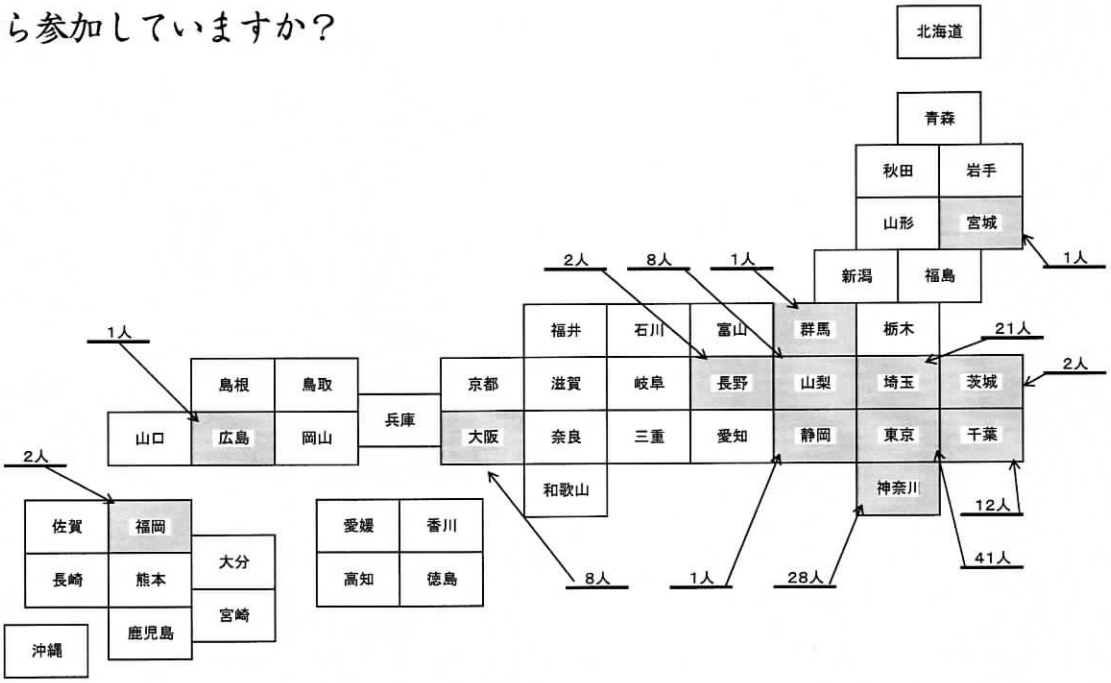
○ ハワイ・マレー沖海戦（1942年、山本嘉次郎監督）
○ 姿三四郎（1943年、黒澤明監督）
○ 一番美しく（1944年、黒澤明監督）
○ 加藤隼戦闘隊（1944年、山本嘉次郎監督）
○ 續姿三四郎（1945年、黒澤明監督）
○ 花の生涯（1948年、大曾根辰夫監督）
○ 稲妻草紙（1951年、稲垣浩監督）
○ 次郎長三国志 第一部～第九部（1952年～1954年、マキノ雅弘監督）
○ 柳生連也斎 秘伝月影抄（1956年、田坂勝彦監督）
○ 明治天皇と日露大戦争（1957年、渡辺邦男監督）
○ 阿波おどり 鳴門の海賊（1957年、マキノ雅弘監督）
○ 日露戦争勝利の秘史 敵中横断三百里（1957年、森一生監督）
○ 大菩薩峠（1960年、三隅研次監督）

歌謡曲

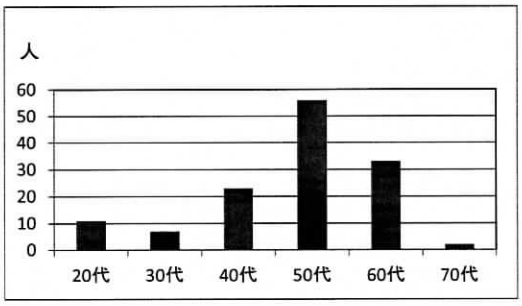
○ タバコやの娘　（岸井明・平井英子、1937年）
○ お使いは自転車に乗って　（轟夕起子、1943年東宝映画『ハナ子さん』主題歌）

団員に聞いてみました

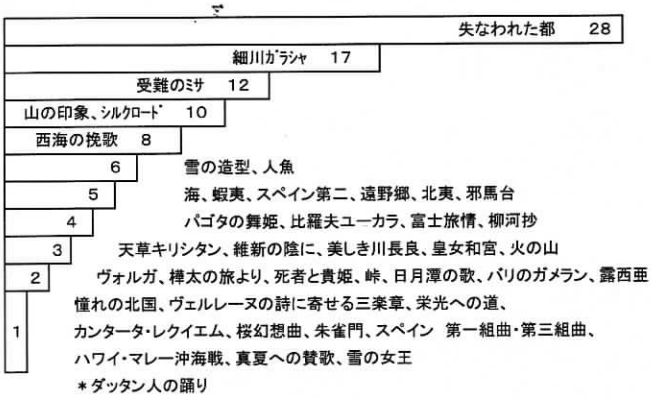
◇どこから参加していますか？



◇年齢は？



◇鈴木静一作品で弾きたい曲は？



◇どこで活動していますか？

アーデンアンサンブル （1）
アイリス マンドリンアンサンブル（1）
厚木ギターアンサンブル （2）
アマデイマンドリンアンサンブル（1）
アンサンブル　La・Vie （1）
アンサンブル　サフラン （1）
アンサンブル　ジュノー （1）
アンサンブル テスタ カルド （1）
アンサンブル・アメデオ （33）
アンサンブル・ビアンカフィオーリ （1）
アンサンブルいずみ （1）
イルヴェントマンドリー （1）
イルマーレ　マンドリンクラブ （2）
浦和ギターマンドリンクラブ （11）
N会 （1）
エルマノマンドリンオーケストラ （1）
大阪市立大学医学部ギターマンドリン部 （1）
オルケスタ・フェニックス （7）
片岡マンドリン研究所 （1）
川崎マンドリン倶楽部 （3）
クリスタルマンドリンアンサンブル （1）
慶應義塾マンドリンクラブ三田会 （7）
コムラードマンドリンアンアンブル （29）
ザ・デスオニオンズ （1）
相模原マンドリン倶楽部 （1）
さくらマンドリンオーケストラ （5）
ＪＴＳＢ楽団 （1）
紫音会アンサンブル （1）
新宿区民オペラ （1）
新所沢マンドリンクラブ （5）
仙台マンドリンクラブ （1）
高崎マンドリン合奏団 （2）
Ｔｒｅ Ｐｅｎｎｅ Ｖｅｒｄｉ （1）
長野マンドリンアンサンブル （1）
新座マンドリンクラブ （3）
二本榎マンドリン合奏団 （1）
八の音マンドリンクラブ （1）
バッカスマンドリーノ （3）
秦野マンドリンクラブ （2）
浜松マンドリンオーケストラ （1）
姫路バルナソス・マンドリンオーケストラ （1）
枚方マンドリン合奏団 （1）
Ｐｉｅｔｒａｐｏｎｔｅ （1）
福岡シンフォニックマンドリンアンサンブル （1）
プレクトラム・ソサエティ （10）
プロムジカマンドリンアンサンブル （1）
ポコリット （1）
堀川マンドリン合奏団 （1）
ポルタ・ビアンカ・マンドリーノ （9）
マーラー祝祭オーケストラ
マンドリーナ　リブレ （2）
マンドリーノ東京 （1）
マンドリン・アンサンブル・モニカ （11）
マンドリンアンサンブル　ラ・ルーチェ （1）
マンドリンアンサンブル・アマービレ （1）
マンドリンアンサンブル響 （1）
マンドリンオーケストラ　コンコルディア （1）
マンドリンオーケストラ“未完成』（1）
マンドリンオーケストラ NOVA （1）
マンドリン合奏団 玄 （1）
三輪マンドリンアンサンブル （1）
モザールマンドリンオーケストラ （2）
有楽町マンドリンクラブ （1）
横浜フィルハーモニー管弦楽団
横浜プレクトラムソサエティーオーケストラ （2）
レヴールマンドリンアンサンブル （3）
レディースマンドリンクラブ （1）
ロス ボラーチョス （1）
ロマンツァマンドリーノアンサンブル （4）　　（50音順）

今までの演奏曲目

鈴木静一展　2011
第一部
劇的序楽 「細川ガラシャ」
楽詩 「雪の造型」
叙情組曲 「蝦夷」

2011年8月20日　東京オペラシティ
第二部
音楽詩 「柳河抄」
交響詩 「失なわれた都」
アンコール「スペイン」第二組曲　第三・四楽章

鈴木静一展　2014
第一部
スペイン第1組曲
ヴェルレーヌの詩に拠れる楽詩「あやつり」
組曲 「パゴダの舞姫」

2014年5月11日　東京オペラシティ
第二部
音楽詩 「美しき川　長良」
大幻想曲「幻の国」～邪馬台～
アンコール　組曲「樺太の旅より」第四楽章

鈴木静一展　2016
第一部
バリのガメラン
組曲 「パゴダの舞姫」

2016年5月15日　東京オペラシティ
第二部
「スペイン」第二組曲
長谷雄郷絵巻による音楽物語「朱雀門」
アンコール　幻想曲「田園風景」
～黄昏の夜の祭～

鈴木静一展に寄せて

1stマンドリン

鈴木先生に直接指導いただいた最後の年代です。日本マンドリン界の歴史に残る作曲家だと思います。今回も先生の思いを表現できるよう演奏いたします。(石橋 一彦)
友人に誘われて、初めての参加です。今まで経験したことのない「別世界」に飛び込んだ感じです。このスケールの大きい、うねりの中での演奏を楽しませていただきます。(岩瀬 由美子)
もう4回目か・・初めて参加してから8年、これからも続くのだろうな。2010年、地元でくすぶっていたところに小穴さんから天の声が。勿論『参加します!』即答。しかし大学卒業以来東京でしかもこんな大舞台で演奏するなんて30年ぶり。不安もあったけど参加してみたら楽しいのなんのって。この楽しさは一人ではもったいない、田舎の仲間を強引に引っ張り込んでワイワイガヤガヤ・・・彼らもずっぽりハマってしまっている。さぁ祭の始まりだ〜!¥(^o^)/(大久保 学)
鈴木静一展が終わった直後は体力、精神力、知力(笑)もう〜すべて持って行かれてマッチ棒の燃えカスのようになり『ああ、もう次回参加は無理だ』と思うのです。なのに、また参加してしまうのはあの、、、大勢で邪馬台を弾いたとき最初の第1音で舞台の底からの地響きと湧き上がり吹き抜けて行った風を浴びたからかも知れません。。。。さあ、今回も風を起こせるかな?(笑)
(大崎 尚子)
鈴木静一作品は奥が深い。やればやるほどはまっていきます。学生時代にさんざん弾いたつもりでしたが、展をやりながら別の角度から鈴木静一の魅力に触れられたことに加え、自分がそれなりの年齢になってきたことを強く感じています。日本人であることの素晴らしさを再認識させてくれる鈴木静一音楽を我々世代で終わらせてしまわない今後のアプローチはないものでしょうか?
(小野 智明)
鈴木静一サウンドに魅せられて2度目の参加です。素敵な皆様と演奏できるのが楽しみです。(風間 順子)
第1回に参加なさった方からのお誘いで、第2回からご一緒させていただいています。皆様と、大&大好きな鈴木静一先生の作品を演奏出来て最高に幸せ!!!いつまでも、ず〜っと鈴木静一先生ワールドに浸っていたいです。(菊地 孝子)
いろいろな方と一緒に演奏できてとても嬉しく思っています。鈴木静一先生の素晴らしい作品に感動しながら弾いています。
(小林 麻理子)
長年に亘り所属団体で鈴木先生の曲を弾いて来ましたが、所属団体とは違う方達、違う指揮者の元で違う鈴木静一を味わいたいと思い参加しました。全国各地からいらっしゃっている方と交流を深めてみると、自分の未熟さを痛感しますし、勉強にもなり何かを吸収出来る事が何よりも楽しみです。(佐々木 裕子)
鈴木静一作品を1stで弾くのは何と39年振り!大いに楽しみます。(鈴木 憲靖)
たくさんの方と一体感を感じながら静一作品を演奏できることがとても楽しく、精一杯心を乗せて弾きたいと思います!(芹沢 綾)
第一回から参加ですが、それまでは鈴木静一作品を弾く機会のない私でした。おかげさまで第四回に辿り着いて思うのは、皆さまの音と気持ちのますますの厚さ(熱さ?)でしょうか。重ねるほどに鳴るとても幸せな鈴木静一先生の音楽の時間、それを愛してやまない皆さまと、またご一緒させて頂けることに心から感謝しております。(立花 敦子)
10代でマンドリンと出会い、鈴木先生と出会いご指導を受けて、先生の曲に魅せられてこんなにも長く続けておりますが、いつも新鮮な気持ちでおります。合奏のメンバーは変わっても、今回もまた仲間そしてお客様と共に先生の作品を楽しめるとワクワクしております。(藤嶋 きよ)
参加の皆様の鈴木静一先生への熱い思いにいつも圧倒されています。今回も楽しい曲ばかりなので、お客様にお楽しみいただけたら嬉しいです。(村上 真澄)
やっと念願かないました。感無量です。もう思い残すことはありません。冥途の土産にします!(柳瀬 洋子)
2011年の1回目から連続4回参加です。もうライフワークとなりつつあります。演奏をしていつも思うのは、自分が日本人であることです。2019年2月24日福岡で鈴木静一チクルス2019のコンサートを企画しています。(チクルスとは一人の作曲家の連続演奏)(山口 章太)
第2回から3回連続の参加となります。個性豊かな指揮者と技量の高い奏者の皆様と共に、この人数で無いと出来ない大曲を作り上げていく幸せな時間を共有できることを、何より嬉しく思っています。演奏会も存分に楽しみたいと思います。(山田 美樹)

2nd マンドリン

いつか弾きたいと思っていた「火の山」をやっと演奏できる（！）。今回は半分以上「火の山」につぎ込んで練習してきました。（岩井 尋絵）
今回もいい曲ばかりです。素晴らしいメンバーと一緒に鈴木静一の世界を思う存分味わいたいと思います。（大崎 和彦）
鈴木静一先生の曲は学生時代弾いた以来です。このオケは大自然の雄大さや童話の恐さを、勢いではなく人生経験の深みで演奏できる年代の楽団でしょうか。初めての個展参加ですが新鮮な気持ちで参加できました。（大西 典子）
演奏会当日は、オペラシティのホールに響く音の重なりを楽しみながら演奏に臨みたいと思います。でも、本番＝楽しかった練習の終わり。・・・もっと続けていたかったな。（大野 康子）
今回も参加でき、鈴木静一作品に浸る幸せな数ヵ月。この機会をいただき感謝です。（尾仲 正子）
気持ちで弾く、魂をぶつけて弾く。大人の演奏を、という気持ちが、本番はとんで「２０代」にもどります、たぶん。（金田 尚之）
第一回から皆勤賞。もう静一展には参加するのが当たり前のようになっています。静一展は他の団体の方と知り合えて、良い刺激になっています。（川村 英夫）
前回に続き２回目の参加になります。夜明け前の静謐な空気を吸ってから東京へ向かう始発に乗り込む事およそ７回。毎回、心構えを新たに取り組んで参りました。今日は、前回全く余裕が無かったステージ上で真に鈴木静一先生を感じたいです。
（久保田 昭次）
２回目の参加です。同じ作曲家の作品を集中して演奏すると、気持ちも集中できる気がします。（小林 千恵子）
所属する団体のメンバーに誘われて参加したのがきっかけで、今回で４回目の参加になります。回を重ねるごとにどんどん鈴木静一の音楽の魅力に引き込まれていく感じがします。練習も楽しくて早起きして長野から通いました。本番、頑張ります。
（小山 陽子）
鈴木静一作品を演奏できること、メンバーの一員として演奏できることを楽しみたいです！（鈴木 彩香）
弾き始めただけで心つかまれる懐かしの曲と、聴くのも弾くのも初めての曲。また新しい世界が拡がります。（諏訪多 れい）
鈴木静一先生の曲で初めて触れたのは「失われた都」。あれから40年、転勤先の北海道や愛知県でも必ずと言っていいほど度々演奏する機会があり、自分のこれまでの人生で常に身近な存在でした。古くからの日本人の心に響く旋律、その中に浮かび上がる情景・・・。マンドリンという楽器の特性を活かした、壮大で、優美で、可憐で、儚い鈴木静一の世界に、今年もまたどっぷりと浸ります。マンドリン続けてて良かったぁ・・・。（高橋 正志）
サントリーホールでのメモリアルに参加させて頂いた時に「静一先生の曲は、弾いていてなんて楽しいのだろう・・自分の中の日本人の血が騒ぐ・・」と感じました。また、普段は其々異なるアンサンブルに所属しているメンバー、特に普段はお会いできない遠方からのメンバーと、一堂に会して友情を育める点にも大変魅力を感じています。（真木 聡美）
鈴木静一展、３回目の参加ですが毎回新鮮な気持ちで臨んでいます。鈴木静一先生の曲を弾くと青春時代に戻ります。いつまでも青春をしていたいです。私事ですが、本日私、誕生日でございます。おめでとうございます・ありがとうございます（一人芝居）（鷲崎 正幸）

マンドラ

鈴木静一の曲に深い思い入れが有るわけでは無く、静一展に関わる人達の存在感／流れ／引力　が無視できないまでに大きくなって来たと感じ、初めて門戸を叩きました。練習は毎回が未知との遭遇で、普段とは違う楽しさ／怖さがあります。さまざまなエイリアン達との交流を存分に楽しみたいと思います。（植木 高）
静一展は３回目の参加となります。鈴木静一先生の曲を演奏する楽しさはもちろん、他団体に所属している方々のお知り合いも増え、皆さんと一緒に演奏できるのも楽しいです。（梅澤 有希子）
思い切って参加した初回の演奏会から感動の連続です。今回も壮大な楽曲を皆さまと演奏でき本当に幸せです。たくさんの曲との出会い、弾きたい一心で集まられた皆さまとの出会いはいつも新鮮です。（小澤 貴美江）
今回で３回目の参加になりますが、鈴木静一作品の巾広さ、奥深さ、そして大編成で演奏する壮大で、かつきめ細かなサウンドに毎回刺激を受けています。（小野寺 哲義）
「火の山」は高校三年の演奏会で弾いた曲。「クラブの人数がそんなに多いのならこの曲はどうかな」と鈴木先生にすすめられた曲。でも、あまりの大曲！不安で躊躇する私達に「大丈夫。金管がなくても、他の楽器が弾くようにしてあるから」と優しく背中を押し、勇気をくれました。再び、ステキなメンバーと「火の山」を弾くのが楽しみです。（亀沢 忍）
今回の選曲、やってみたら面白かった！（北川 輝彦）
鈴木静一作品は演奏する度に新しい発見があり、とても楽しいです。演奏会に参加させていただけることに感謝します。（木下 孝子）
学生時代、全マンやＪＭＪとかでいろんな団体が集まって演奏会をやりました。そんなお祭り騒ぎ的な雰囲気を静一展にも感じます。会場のみなさんと一緒になってわいわいやりたいですね。（小玉 亨一）
第１回に参加した時の楽しさと感動が忘れられずに、毎回参加させていただいています。鈴木静一先生の曲は、どの曲も弾いていて熱くなります。皆さんと一緒に大編成の迫力を楽しみたいです。（今野 洋子）

友人に誘われて、初めて参加しました。この静一展の合奏団の中に自分も入っているのだと言うことが、何だかまだ信じられないような気がしています。沢山の音に包まれながら、気持ちよく弾いて、楽しみたいと思います。(鈴木 ひとみ)
初めて出逢った鈴木先生の曲は「峠」でした。ゆったりとしたイメージがあります。大学3年の時に同期の数年で先生のお宅を訪問し「比羅夫ユーカラ」のスコアを頂きました。みな緊張していたことは今でも忘れられない思い出です。(高橋 喜代子)
ふだんは違う団体の方々が一堂に会して気持ちをひとつに演奏する。また熱い時間を味わいたくて2度目の参加です。
(都筑 文子)
鈴木静一の世界に浸れる幸せと、楽しいメンバーの中で弾ける幸せにはまってます。(時庭 美樹子)
初めての参加です。憧れの個展演奏会、頑張りたいと思います。(砥堀 由美子)
前回の演奏会を客席で聴かせていただき、「朱雀門」の素晴らしい演奏に感動し、次回は是非演奏参加したいと熱望しておりましたので、仲間に入れていただけて嬉しいです。4曲中3曲は初めて弾く曲で、鈴木静一の世界を満喫できるよう練習に励んでおります。(中長 典子)
学生の時、初めて「細川ガラシャ」を演奏して以来、その魅力に取りつかれています。100名を超える大人数での演奏はまさに鈴木静一作品の醍醐味を味わえることでしょう。(濱田 洋行)
初参加です。前回は客席で聴かせていただきました。とても楽しそうな演奏会だったので、今回参加させていただきました。(藤井 秀行)
静一展は、毎回ワクワクさせてくれます。自身3回目の火の山、どんな曲になるのか楽しみです！(古川 祐子)
2回目の参加です。今回も楽しく演奏したいと思います。(松室 八重)
情感あふれる演奏を、会場の皆様にお届けしたいです。(馬渡 明美)
管や打楽器の入った鈴木静一の大合奏を楽しみたくて参加しました。(森 順子)
ドラで熱く語るような演奏をしたいです！(横井 さえ子)

マンドチェロ

エントリーできて嬉しかったのですが、その直後福岡に転勤になりました。もちろん福岡から出演いたします。(飯野 竜一)
今回が初めての参加です。出演される皆様の熱意が伝わり、私も心が熱く！なっています。心が一つになって、同じ目標に向けて頑張る皆様の姿はとても美しく、私もその一人でいることがとても幸せです。いや～音楽っ）て本当に良いものですね～！(石田 裕之)
2年前に初めて参加しました。あの時の感動をまた味わいたい、そして、その時聴きに来てくださった、マンドリンオーケストラや鈴木静一作品を初めて聴いた沢山の友人達が、まだ是非聴きに行きたい、と言って下さったので、今回も参加させて頂きます。思いっきり楽しみたいと思います。(漆原 頼子)
前回の個展を客席で聴き、“次は舞台に乗る！”と決意して早2年。いよいよその時がやって来ました。普段少人数のアンサンブルで活動してるので、個展は、練習からワクワクして楽しんでいます。本番、燃えます、萌えます（笑）やってやりましょう、火の玉のような想いを込めて！(大田 理恵)
各作品に込められた鈴木先生の歴史と文化に対する深い思いを感じながら、個展ならではの重厚な演奏ができることを幸せに思います。(小尾 きよこ)
“幸せ”のひと言です。(加藤 恵子)
静一作品の喜怒哀楽をマンドロンチェロの音に乗せて　客席のいちばん後ろまで　そしてお客様の心の奥まで響かせたいです。(加藤 粧知子)
鈴木静一作品にどっぷり浸かって、オペラシティのステージを存分に堪能したい！(木下　政実)
チェロではただ一人、初回から皆勤です。個展チェロの葛西と呼んで下さい。(河野 直文)
「静一展、やるぞー！」と言ったら全国からこれだけのプレイヤーがすぐ集まっちゃうんですね。すごいね！(駒崎 明)
関西からの参加です。同志と再会してオペラシティの舞台に立てる事が至福の喜び。月の変容とルディは他ではなかなか演奏されません。本番は楽しみたいと思います！(塩見 正成)
高2で接した「山の印象」。弾き散らしていた時期でどこか特別な曲を感じていました。大1で「スペイン第二」の直接指導を受けて、ああこの方が鈴木静一先生かと。その後コムラードでの指導へと。氏の作品は私にとって特別な作品群となりました。
(高橋 信男)
久しぶりに参加できました、たのしくさせていただきます。(竹安 裕之)
たくさんのチェロ奏者に出会いたかったので参加しました。皆さん、素晴らしい奏者ばかりで参加してよかったです。
(望月 羊子)
音楽仲間からのお誘いで2回目から参加。100名以上のメンバーとの演奏に感動しハマってしまいました。短期間の練習で曲を作り上げていく過程も楽しいです。(山田 弥生)

マンドローネ

第２回に続いて２回目の参加です。本当は毎回参加したいのですが、そうもいかず大変残念な思いです。“静一”が大好きで、一緒に演奏するという共通の思いを持って集まった仲間。初めて会った方とも、旧知の友の様に感じる。その中で“静一”の音楽に包まれる幸せ。今回も素晴らしい音楽にどっぷりとつかり、幸せな時間を、客席の皆さまと一緒に楽しみたいと思います。（中村 一）
事務局として運営サイドから、またパートTOPとして演奏者サイドから見て感じるのは、参加者の皆様の鈴木静一作品への「熱量」が回を重ねる毎に高まっている事です。全国各地から幅広い世代が集まるこの演奏会を通じて、その熱さを絶やす事無く、鈴木静一作品の素晴らしさを若い世代に伝承する良い機会になればと思います。（古川 治）

ギター

日に日に重たく感じられるギターを背負っての練習通いですが　静一作品の誘惑には勝てません。若い人の遠方からの参加もあり　静一作品の魅力が受け継がれていくことをとても嬉しく思います。（飯田 百合子）
第１回目から参加し、学生時代には全くご縁の無かった鈴木静一の世界に足を踏み入れ今回で４回目。１番感じたのは、参加しているメンバーの鈴木静一愛。ドラマティックで時に繊細な静一先生の世界を感じつつ演奏したいと思います。（池上 美枝子）
前回から参加させていただいてます。大学を卒業して以来マンドリンオーケストラでは弾いてこなかったのですが、その間もいつも、ヘコんだときや、気合いを入れるとき、学生のときに弾いた鈴木静一作品が心の中で鳴っていた気がします。今回は、弾きたかった「火の山」を弾けるのが嬉しいです。（伊藤 朋之）
私が初めて演奏した鈴木作品は「シルクロード」でした。指導のため私たちの学校まで来てくださった先生は演奏を聴くなり、私たちの音を「荒削りの音」と評されました。飾る余裕もなく必死で弾く私たちの素朴な音を評した言葉と受け取りました。このときに先生が着想されたのが「雪の造型」で私たちは翌年演奏しました。こうして私は大学の４年間鈴木静一作品とともにありました。あれから50年。あの日々を思いながら演奏したい。（今井 潤）
学生時代に熱中した『鈴木静一』。辛いときに鼓舞してくれる原動力。全国の静一愛好家の思いが集い、『静一展』として新たな発見を共有し、永遠に熱中したいと思っています。練習回数は少なくても、この会場を包む一体感を、また味わえる幸せ‼（大池 栄一）
荒ぶるではなく「ちはやふる」で！　熱い想いをｐダウンに込めます‼（大村 慎一）
同じ思いを持って集まった仲間と演奏できることを楽しみにしています。（金子 律子）
初参加です。与えられた機会に感謝し、一生懸命演奏させていただきます。学生時代に数多く演奏した鈴木静一作品。30数年ぶりのステージですが、鈴木先生の情熱が必ず伝わるよう頑張ります。（齊藤 晃宏）
学生時代に「細川ガラシャ」「朱雀門」に出会って鈴木静一作品の虜になってしまいました。静一を弾きたい！と　同じ思いで集まってきた仲間たちと演奏するのは　とても楽しく幸せです！若い方の参加もとてもうれしく思います。ずっとずっと静一作品が弾き継がれていきますように！！！（佐々木 真澄）
いろいろな団体から、そうそうたるメンバーが集まっているので、とても勉強になります。前回は仕事や他団体とのかけもちがやりくりできずにお休みし、客席で大後悔したので、今年は全ての予定に優先させて、背水の陣！毎回新しい音楽を浴びるようで、こんなに幸せな活動はないと思うくらい、楽しんでます。本番で思い切り自由に弾けるよう、頑張ります。（島田 馨子）
連続の参加になります。先生の曲はギターにいろんな表現をさせてくれるので弾いてて楽しいです。大人数の迫力を伝えられたらと思います。（高島 理英子）
大学時代の友人たちと久しぶりに一緒に合奏ができる事を楽しみに参加させていただきました。人数の少ないクラブでしたが、定演のプログラムには代々静一作品の枠があり、当たり前のようにその音楽に触れる日々でした。今回、当時は味わうことの出来ない人数による合奏に参加させていただき、その世代の広さや曲への熱さを感じ、わくわくしながら弾いています。指揮者や事務局の方々、そして参加者の方々の静一愛があってこの会が続いていることが素敵だなぁと思っています。そんな会に参加させていただけたこと、とても感謝しています。どうぞ末永く静一作品とこの会が引き継がれていくことをお祈りしております。（滝沢 由佳）
とても有名で素晴らしい名曲の数々。しかもギターを知り尽くしたパート楽譜。なのに自分が学生時代にやらなかった鬱憤をここで晴らします。（立花 淳一）
憧れだった曲に参加できるので精一杯頑張ります。（田邊 正洋）
大編成の演奏を実施してみたくて今回初めて参加しました。どの曲もとても難しいのですが、管楽器や打楽器も入った多彩な演奏を楽しんでいます。本番も楽しんで参加したいと思います。（津脇 努）

何回か演奏会を聴きにいき前回の朱雀門の演奏に感動し、今回初めて参加させていただきました。大合奏での鈴木静一作品は心のツボをグイグイ押してくれて気持ちいいです。鈴木静一作品の魅力が伝わる演奏会になるよう微力ながら頑張ります。（中長 敬蔵）
高校のマンドリンクラブで鈴木静一作品に衝撃を受けて以来（うわ～、もう47年前！）、ずっと静一ファンを続けています。35年のブランクを経て再開したマンドリンオーケストラ、静一展参加も今回で３回目ですが、出会えた仲間と鈴木静一作品を演奏できることを大変幸せに思っています。（中塚 洋二）

1回目から参加で、4回目となりました。今回は2部の2曲が、私にとっての初めての演奏となります。今回も新たな旋律との出会いに鈴木先生の曲の奥深さを感じています。一人でも多く、鈴木先生の素晴らしさをお伝えできたらと思います。そして鈴木先生の曲がいつまでも、弾き継がれていくことを祈っています。(西田 佳枝)
今回で3回目の参加となります。たくさんの方々と楽しく演奏でき、そしてその思いが聴きに下さっている方々にも届けばと思います。(野口 勇)
大阪から始発で眠い目を擦りながら練習に向っていた、初参加の大学生です。みなさん優しくて、鈴木静一への、合奏への愛に溢れた方ばかりでとても素敵です。憧れの演奏会にステージの上から参加できること、大変幸せに思います。(畑 夏生)
高校1年の時、初めて弾いた楽曲が「火の山」でした。それ以来、今日は2回目の演奏になります。高校時代とにかく夢中で弾いた曲でしたが、約40年ぶりに対面すると懐かしく自然と指が動いていきます。今回で4回目の参加になりますが、いつもながらの熱い想いをもった同志に囲まれて、九州へ月へスイスへと旅を楽しんでいきます。(肥田 栄治)
鈴木先生には学生時代に直接ギター奏法を教えていただき、大好きな曲がたくさんあります。卒業して何年もたつのに、同じ思いの仲間と共に静一展の舞台に立てるのは本当に嬉しいことです。毎回、ワクワクしながら練習に参加しています。(前田 洋子)
なんで静一展に惹かれるんだろ　練習場に次々とメンバーが集まってくる朝のワクワク感？　ギターの聴かせどころでタクトが振られる瞬間の緊張感？やっぱり練習後の愉快な飲み会？　嬉しい再会や新たな出会いも捨てがたい。今日は丸ごと楽しもぉっと (宗像 俊幸)
今年の演奏会は、5年に一度OBも参加する大学の記念演奏会とも重なり、鈴木静一作品をたくさん演奏できることになりました。幸せなことです。(森木 晋也)
第1回目に参加できなかったのですが…、私にとってこれが3回目の参加となりますが、いつもいつも楽しく過ごさせていただいております。今回もよろしくお願いいたします。(山川 貢平)
鈴木先生の音楽は、心に沁みますね。何年経っても風化しません。今回も参加できて、幸せです。(山田 智子)

コントラバス

今回で3回目の静一展参加です。「オペラシティ」という特別な場所で、沢山の奏者の方々と一緒に演奏できるのはとても幸せなことです。缶コーヒー&レッドブル飲んで頑張ります。(石井 紳一郎)
今回は鈴木静一の知られざる表現、特に劇伴音楽家としての作風をお楽しみいただけるラインナップとなっております。演劇的音楽世界を存分にお楽しみいただけるよう、奏者一同力を尽くして挑みます。最後までごゆっくりお楽しみください。(石毛 貴子)
鈴木静一先生の作品からは、味わっても味わっても味わい尽くせぬ、奥深い魅力を感じます。学生時代にできなかった名曲の数々を、存分に味わいながら演奏したいと思います。(岸 洋充)
今まで鈴木静一作品を弾く機会があまりなかったので、今回参加できてとても嬉しいです。(斎藤 友美)
普段、私はオーケストラでコントラバスを演奏していますが、この「静一展」にもたびたび参加させて頂いています。鈴木先生の作品は、歴史や古典、自然などを題材とした作品が多く、欧米を中心としたクラシック作品とは違った楽しさや発見が毎回あります。鈴木作品は私達が忘れかけている歴史・風景・自然等を語りかけている気がします。今回はどんな鈴木作品に出会うことができるか、どんな演奏会になるか、非常に楽しみです。(寺嶋 勝之)
コントラバス愛　(福島 康平)
一期一会の演奏会。出会いとご縁に感謝しつつ、自分の「全て」を出し切ります！(出し惜しみナシです！)(村里 眞美)

指揮者
管・打楽器
ピアノ

宇宙を駆け巡るロマンにみなさんとともに浸りたい。(小穴 雄一)
鈴木静一…それはもう、1つの音楽ジャンル。特別な一角。そして、そこに人が集まる。素晴らしい。(高草木 典喜)
今回演奏する交響詩「月の変容」はドビュッシーの月の光の変奏かと思いきや意外な方向に話が発展していくおもしろさがあります。ピアノの雰囲気を出すのも難しいですが、また違う一面を表現できればと思います。(小島 規子)
皆さんの想いを受けて、鈴木静一氏の壮大な世界に行けるように頑張ります！(三好 理英子)
初めて参加します。鈴木静一の世界を楽しみたいと思います。(杉山 孝一)
ただ熱くなるばかりではない、繊細かつ壮大な演奏が出来ればよいなと思ってます。(岩切 大朗)

ナレーション　新澤　泉

東京都出身。武蔵野音楽大学器楽学科を卒業、円・演劇研究所を経て2003年民藝に入団。初舞台は「浅草物語」04年。最近の舞台は「冬の時代」「炭鉱の絵描きたち」「野の花ものがたり」「『仕事クラブ』の女優たち」など。他にドラマ「ガラスの家」など精力的に活動している。

ソプラノ　手島　由紀子

京都市立芸術大学院修了。フランスにおいて、J・バダール女史の指導を受ける。
オペラ「フィガロの結婚」、「魔笛」、「ラ・ボエーム」等に出演。フランス歌曲を得意とし、各地にてソロ・リサイタルを開催、高い評価を得る。「第九」「メサイア」「レクイエム」等のソリスト、またマンドリン・オーケストラとの共演にも定評があり、一昨年の鈴木静一展に引き続いての出演となる。ジャズやポップスなどジャンルを越えたセッションも行っている。二期会会員。

アコーディオン　大田　智美

アコーディオンを10歳から江森登氏に師事。国立音楽大学附属音楽高等学校ピアノ科卒業後、渡独。2009年フォルクヴァンク音楽大学ソリストコースを首席で卒業、ドイツ国家演奏家資格（Konzertexamen）を取得。御喜美江氏に師事。またウィーン私立音楽大学でも研鑽を積む。帰国後は、ソロや室内楽、新曲初演、オーケストラとの共演等、クラシックや現代音楽を中心としながらも、ジャンルを超えた様々な演奏活動を行い、この楽器の魅力と可能性を発信している。

© 荒谷良一

アンケートおよび、CD・DVDお申し込みのご案内

本日はご来場ありがとうございました。
お楽しみいただけましたでしょうか。よろしければ、本日の演奏につきまして、皆様の感想をいただけますと幸いです。また、本日の演奏会のCDとDVDを作成する予定です。ご感想、および、CD・DVDのお申し込みにつきまして、以下のURLにて、6月20日（水）までお受けしております。
QRコードからもアクセスいただけます。どうぞ、よろしくお願いいたします。

♪アンケートはこちらから
http://ws.formzu.net/dist/S67226665

♪CDおよびDVDのお申し込みはこちらから
http://ws.formzu.net/dist/S94985686

＊開演中の操作は、ご遠慮いただけますようお願いいたします。

個展マンドリンオーケストラ メンバー

指揮

高草木典喜（1部）
小穴雄一（2部）

コンサートマスター

小野智明

1stマンドリン

石橋一彦
岩瀬由美子
大久保　學
大崎尚子
小野智明♪
風間順子
菊地孝子
小林麻理子
佐々木裕子
杉本真紀
鈴木憲靖
須藤純子
芹沢　綾
高田美和子
立花敦子
野村　香
藤嶋きよ
村上真澄
森中千里
柳瀬洋子
山口章太
山田美樹
渡邊麻友

2ndマンドリン

秋山直子
岩井尋絵
大崎和彦♪
大西典子
大野康子
尾仲正子
金田尚之
川上泰典
川村英夫
木谷　準
久保田昭次
小林千恵子
小山陽子
鈴木彩香
諏訪多れい
高橋正志
田中恵子
鳴海喜代美
真木聡美
増田勢津子
横山隆二
鷲崎正幸

マンドラ

秋山俊一
植木　高
梅澤有希子
小澤貴美江
小野寺哲義
亀沢　忍
北川輝彦♪
木下孝子
見城　紳
小玉亨一
今野洋子
鈴木ひとみ
高橋喜代子
都筑文子
時庭美樹子
砥堀由美子
中長典子
濱田洋行
廣井寿子
藤井秀行
古川祐子
松室八重
馬渡明美
森　順子
横井さえ子

マンドチェロ

飯野竜一
石田裕之
岩崎真美子
漆原頼子
大田理恵
小尾きよこ
加藤恵子
加藤粧知子
木下政実
河野直文
駒崎　明
塩見正成
高橋信男♪
竹安裕之
深沢誠一
村山麻理
望月羊子
山田弥生

マンドローネ

中村　一
古川　治♪

ギター

飯田百合子
池上美枝子
伊藤朋之
今井　潤
大池栄一♪
大村慎一
金子律子
齊藤晃宏
佐々木真澄
島田馨子
髙島理英子
滝沢由佳
立花淳一
田邊正洋
津脇　努
中塚洋二
中長敬蔵
中村友規
西田佳枝
野口　勇
畑　夏生
肥田栄治
前田洋子
宗像俊幸
森木晋也
山川貢平
山田智子

コントラバス

石井紳一郎
石毛貴子
岸　洋充
斎藤友美
寺嶋勝之
福島康平
村里眞美♪

フルート

三好理英子♪
木村　裕

オーボエ

杉山孝一

クラリネット

小島規子
近藤育代

ファゴット

相良　怜＃

ホルン

橋本由香里＃

トロンボーン

奥積すなお＃

ピアノ

岩切大朗

打楽器

荒木俊行♪
石井利樹＃
大森美和＃
三原千夏＃

ステージマネージャー

久保光司

題字

弘岡　郁（有芳）

♪　パートトップ
＃　賛助